



あめりかの身勝手
南海部覚悟

目次

1 ページ	1
2 ページ	3
3 ページ	5
4 ページ	8

1 ページ

「如何するんですかぁ～先輩！」

甘怠い笑子の囁きが玲子の耳元で拡がった。

「——如何するって、何を？」

「舟入本町の私達のマンション、荷物入れたなりそのままなんですよ！ 日持ちしないものじゃないけど食品も少し入ってるし、段ボール開ける前にお掃除もしたいじゃないですか？」

「仕方ないじゃない非常警備態勢なんだから。でも、着任早々三日間も自宅に帰れないなんて運が悪いわねえ・・・。」

広島県警本部刑事部捜査一課、刑事部屋である。着任以来カップルは緊急対応に備えて本部に待機、其処を動けなかった。刑事部屋に待機中の他の多くの刑事達の視線は、正面壁の大型モニターの衛星画像に注がれている。



デビルタワー.jpg

気象衛星から撮影された北アメリカ大陸の映像は衝撃的だった。合衆国中西部、イエローストーン国立公園周辺を始点として、白灰色の噴煙が上空の強い偏西風に乗って扇状に東に拡がっている。

主要都市が点在する東海岸の海上には、無数の航跡が錯綜する。大西洋を乗り越えた、ヨーロッパやアフリカ、南アメリカからの救援の船舶の航跡だった。まだ都市の構造が衛星から何とか目視できる東海岸は、世界中のメディアによってその悲惨な状況が刻々と伝えられつつあったが・・・心配なのはそれより西、広大な穀倉地帯（プレイリー）からロッキー山脈の東面にかけての地域である。濃密な噴煙に覆われ、微粒子の激しい摩擦による帯電大気的作用で、有線・無線を問わず一切の情報通信が寸断されていた。10時間余り前に、デンバーから衛星電話のコンタクトがあったのを最後に、以降の音沙汰が確認されていない。ロッキー山脈の広大な範囲を、高温の火砕流が覆っていた。ワイオミング・コロラド・ネブラスカ・カンザス・アイオワ・ミズーリ各州上空の大気温度の観測から、この地域の生存者は絶望的と考えられつつあった。

太平洋沿岸、西海岸の海上にも無数の航跡が確認できる。南部メキシコとの国境においては、共和党政権時代に構築された背の高いフェンスを乗り越えて、今はアメリカ市民がメキシコへと流れ込んでいる。遣る瀬無い悲壮感が、乾いた褐色の大地に広がる。赤ら顔金髪のニュースキャスターが、今にも泣きだしそうな表情で、現地から伝えていた。

*

一課長のスマホに連絡が入る、眉の太いきりっとした顔立ちに生気が蘇った。

「警備部から出動要請だ！ 呉駅近くの繁華街で銃撃事案、住民がパニックになってる。全員防護装備――拳銃の携行を許可する！」

暮れなずむ瀬戸内の水面が紅く輝いている、駅から呉港へと続く長いペDESTリアンデッキの下に、ただならぬ空気が漂っていた。通りの角々に人々の不安な視線が身を潜めている。

玲子たち県警本部の刑事の一群は、防護装備に身を固め、拳銃のホルダーに手を添えながら、慎重にデッキの上を進んでいた。誰かの鋭い叫び声とともに、人々の視線が眼下ビルの碧いガラスウォールに注がれた・・・その刹那、ガラスウォールが粉々に破壊され何か大きな塊がビルから飛び出てきた！

「――戦車だ！」

一課長の野太い叫び声が上がった。

「違います！ LAV - 25、海兵隊の装輪装甲車です――。」

隣の若い刑事が小さな双眼鏡を覗き込みながら呟く。

「――海兵隊？ 岩国基地の米軍か？」

装甲車に続いて、見覚えのある軍用車両が数台、呉港の方向へ走り去った。

「ハンビーです、この辺であんな装備を運用しているのは、岩国基地の海兵隊しかいません――。」若い刑事が続ける。

「詳しいな！」

「岩国基地でアルバイトしてました・・・。」

呉市最大のショッピングモールの脇を抜け、大和ミュージアムの手前を左に折れて慎重に進むと、橋の先が有刺鉄線のバリケードで閉鎖されている。先程の装甲車の一群がバリケードに差し掛かる、銃を持った兵隊が出てきて有刺鉄線を開けた。

「どうやら、橋の向う側を閉鎖するつもりだ。本部に状況報告、無理に近づくと危険だな、だれか英語のできるのは居ないかなあ・・・。」

「——私、話を聞いてきます！」

さっきの若い刑事が手を挙げた。

「英語できるのか？」

「だから、岩国基地で通訳で働いてました。」

2 ページ

一課長と若い刑事が橋を渡っていく、バリケードの奥から兵士の一人がヘルメットを取って出迎える。両手を挙げ武器を持っていないのをアピールしながら、若い刑事が英語で話しかける、驚いたことに日本語で返事が返ってきた。

「私、岩国基地長いですから日本語問題ありません、Thank you for your regard。ここから先“アレイからすこじま“までを block off させていただきます。私たちの要求は、海上自衛隊呉総監部を通じて、日本政府に連絡してあります。」

「——どういった、要求なんでしょうか？」

「今、私たちの代表がペンタゴンと交渉中なので、詳細は説明できませんが・・・我々は本国に帰りただけなんです。」青い瞳の奥が一瞬煌めいた。

一課長のインカムに連絡が入る、応答した唇が青ざめた。

自らを落ち着かせるように掌を上下させて、「分かりました、一旦ここは退きます。但し閉鎖された地域には、海上自衛隊の施設以外に一般市民の住居も存在します。その方々の生活に支障をきたさぬよう、充分配慮頂きたい・・・。」

「No problem！ 多少の煩わしさを我慢頂ければ、市民へ一切の不利益は、お掛けしません。」

「——それと。」

若い刑事が思い出したように呟いたのを受けて、「それと、先程のビルの Glass wall は後日必ず Compensate いたします。岩国基地からの一隊が、駅の近くで道に迷ったのです。路地に入り込んだ LAV-25 が出るに出られなくなって・・・。」



ホワイトハウス.jpg

閉鎖された対岸から二人が帰ってきた。橋の袂で身構える玲子たち配下の刑事に向かって、一課長が大声で説明する。

「米軍岩国基地所属の“一部海兵隊員”により、海上自衛隊総監部が制圧占拠されている。我々は応援の警備部スタッフが到着するまで、ここで待機する！」

「——海兵隊がまた何で！」

後方で声が上がる。

「彼らは、被災中の本国へ帰還する為の船舶の手配を、日本政府に求めている。更に安全な航行の保障をペンタゴンに要求しているようだ！」

一課長が答える。

「何で船なんですか？ 早く帰って家族を助けたいなら自分たちの軍用機があるでしょ？」

「確か、北アメリカ上空は噴煙の影響で航空機の飛行が禁止されてるって、ニュースで言ってたぞ！」

誰かが小声で呟いた。

「火山性のエアロゾルが成層圏まで濃密に拡散しているなら、ジェットエンジンでの飛行は自殺行為だ……。」

「呉の海自は何してたんだ！」背後で大声が上がる。

「地震の臨時情報発令で、所属部隊は全て外洋で作戦行動中だ、総監部には事務系スタッフ以外、職務についてなかった。」

「——いえ、それだけじゃ無い筈です。此処には確か文化庁のスタッフが……。」

玲子の声に一課長が振り返る。

「——黒木係長、何か知ってるのか？」

玲子は今朝聞いた、秋山の話思い出していた。文化庁の作業服を着たスタッフが、深夜の自衛隊基地で、潜水艦や護衛艦に、何やら物資を積み込んでいた……確かアレイ

からすこじまって言った。

「——文化庁が国宝の国外搬出作業を、呉の自衛隊基地でやってたって云うのか？」

話を聞いた一課長が腕組みをしながら呟く。

「それが本当なら、我が国の重要な国宝の大半が、彼ら海兵隊の手元にあるってことだが……。」

一課長のインカムにコールが入った。

「黒木係長、県警本部から至急帰庁しろって……重要な面会人が来てるらしい。」

*

「——三浦副長官！」

県警本部で玲子を待っていたのは、内閣官房副長官の穏やかな笑顔だった。

「一別以来です玲子さん！」

一層相好を崩しながら歩み寄ると、「毎度のことですが、あなたの顔を見ると、懐かしさと頼もしさで、日頃のうっ憤やストレスが根底から解消されるようです……どうですか？もし宜しければ、私とお付き合いして貰えませんか？」

背後に寄り添っていた笑子が、二人の間に割って入る。

「副長官！今日は先輩を口説きにわざわざ広島までいらしたのですか？」

腰に当てた両掌を上を開きながら、「——冗談ですよ！玲子さんにはあなたというちゃんとした配偶者がおられるのはどうに承知しています。お付き合いというのは、お二人とも今から広島県警の指揮を離れて、私に同行頂きたいということです。」

「同行って、どこに行くんですか？」

「——呉総監部を占拠している、一部海兵隊の代表に会いに行きます。どうでしょう、何も訊かないで私に同行頂けませんか？」

3 ページ

三浦の操縦する小型ヘリが二人の女刑事を乗せて、広島県警の屋上ヘリポートを飛び立ち、南に向かう。

「——副長官、ヘリの操縦もされるんですね！」

ヘッドセットのマイクももどかし気に、リアのシートから身を乗り出しながら笑子が尋ねる。

「前職がヘリのパイロットしてましたから……。」

「——前職？」

今度は玲子が尋ねる。

「東大在学中に、コロンビア大学に留学する機会がありましてね・・・暇だったから地元のヘリスクールでライセンスを取得したんです。帰国して就職したのが民間の航空測量会社でして、ヘリパイロットとして2年間働きました。」

「じゃ副長官、東大からそのまま生え抜きの高級官僚(キャリア)ってわけじゃないんですか？」

「私は、自分がキャリアだとは思っていません・・・キャリアの行く末は概して悲惨ですから。」

「そういった同僚を何人もご覧になってらしたのね・・・。」

玲子が呟く。



連邦議会.jpg

ヘリはやがて、呉総監部屋上のヘリポートにゆっくりと着陸した。出迎えた兵士に先導され、長い廊下の奥の小部屋に通された。殺風景な10畳ほどの真ん中にスチールの机、その上に場違いに豪華な錦紗に包まれた三つの物体が・・・。

「ひとつずつ持って下さい、長いのは重たいですから私が持ちます。」

ドアの近くで、兵士と英語で何やら言葉を交わしていた三浦が、話を終えて振り返ると、机の上の長い錦紗のひとつを、徐に抱え上げた。

「さあ！話は終わりました、県警本部に戻りましょう。」

玲子が抱え上げたのは20センチ角ほどの正立方体である、錦紗の下は黒漆の木箱のようだ。笑子のそれは、もっと平べったい直径30センチほどの円盤に腕が一本突き出ている、錦紗の下は同じように黒漆だった。

＊

「やっぱり何か訊きたそうなお顔ですね、お二人とも・・・。」

総監部を離陸したヘリの中で、ヘッドセットを通じて3人の会話が再び始まった。

「——当然ですよ！ このままご赦免になれると思ってるんですか、副長官！」

笑子がマイクに喚きたてる。

「まあ、ここで逮捕されちやかなわんから、差し障りのない範囲でお話します・・・今回の臨時情報発令に際し、文化庁が国宝の幾つかを国外へ持ち出そうとしていたことはご存じですか？」

「今朝、エアロバイク隊員から報告を受けました。」

玲子がすかさず受ける。

「新領土となったカムチャツカ島に、自衛隊の艦艇で国宝を搬送する計画でした、小型で脆弱な宝物は潜水艦で、大きなものや破損の可能性が少ないものは、護衛艦で・・・。」

「——壊れやすい宝物は潜水艦で？」

「水中なら波浪の影響を受けないからよ、この時期日本海からオホーツク海は波が高いの・・・。」

「動かせる宝物はすべてカムチャツカに搬送する予定で、西日本にある国宝は臨時情報発令のはるか以前に、呉総監部に集められました。ところが、出港の前日になって・・・。」

「海兵隊の一团に占拠されて搬送できなくなった・・・。」

「でも、彼らの目的は日本の国宝を差し押さえることじゃないでしょ？ もう話は着いてらっしゃるんじゃないですか・・・。」

「流石玲子さん、国宝を積み込んだ自衛隊の艦艇は、潜水艦も護衛艦も今夜遅くカムチャツカに向けて出港する予定です。それに関して特に支障はありません・・・。」

「日本政府が、海兵隊員の要求を呑んだということですか？ アメリカ本土へ送り届ける輸送船か何かを準備するってところで・・・。」

笑子がヘッドセットを外しながら、三浦の耳元で小声で呟く。

「——それは出来ません！ 外国の軍隊を搬送する国内法はありませんし、安保条約にも地位協定にも同様の規定はありません。ましてや、現在彼らは非正規の軍隊なんです。」

「じゃ、彼らこのままどうなるんですか？」

「日本政府が如何こうする事案じゃないんです、交渉の窓口はペンタゴンで、決定権は合衆国大統領なんです！」

珍しく三浦が声を荒らげた、興奮した若者の甲高い声が、女刑事カップルのヘッドセットに響き渡る。

「——は、話を変えましょ！ ヘリに積み込んだ三つの宝物は、カムチャツカに搬送しなくていいんですか？」

慌てて、玲子が取り繕う。

「それについては、あまり詳しく話せません。」

急に三浦の声が低くなる。

「——同じ国宝なんでしょ？」

「それについても・・・やっぱり話せません。お二人にお願いしたいのは、三つの宝物を持ち帰ったことを、広島県警のスタッフを含め、誰にも話してほしくないのです。」

それっきり三浦は、頑なに口を噤んでしまった。

4 ページ

女刑事カップルが県警本部に戻り、再び市内の警備に就いたのは2時間後のことだった。呉港の橋の袂に向かう車の中で、玲子が呟く。



日米フラッグ.jpg

「どう思う、笑ちゃん？ 副長官の話……。」
「——どう思うって、何も話してくれないから何も分かりません！」
「何の説明もなしに、誰にも話すなって念を押したのは、同じように誰にも話すなって念を押しながら、不明瞭な情報を不明瞭なまま、拡散して欲しいってことかもね……。」
「——どういう事ですか？」
「あれは国宝じゃないと思う、“三種の神器” 天皇家の御物よきっと！」
「……？」
「あの三つの宝物を受け取りに、私たちが特に指名されたってことは、政府内のスタッフとじゃ副長官にとって都合が悪いってこと……。」
「——どういう事ですか？」
笑子が質問を繰り返す、眼下の水面を夜の帳が覆い、対岸の汀に水平の灯列が明滅し始めた。呉の湾口に向け、大型の護衛艦が白波を立てて航行している、先行して暗い波間にクジラのような背中が見え隠れする。国宝を積み込んだ海上自衛隊の艦船のようだった。

「官僚に厳しく箝口令を敷いて命令すれば、それこそ一切水を漏らさないまま極秘で作業を進められる。少なくとも今の与党政権が続く限り、今日の件は外部に絶対漏れないわ。与党の一部に天皇家の御物が、一瞬でも外国人の管理下に置かれたのを、認めたくない勢力が存在するのもかも知れない。三浦副長官、多分そんな勢力から御物を秘密裏に取り返すよう、依頼を受けた・・・。」

「今の与党にはそれとは別に、皇室の存続に疑問を抱く勢力も存在する。それらの狭間でうまく立ち回りたかったんじゃないの、あの食わせ者・・・。」

「メディアに大々的に報道されるのも困るし、全く漏れなくて闇に葬られてしまうのも悔しい・・・。」

呆れ顔で笑子が呟く。

「———そんなところね、私達なら利害の当事者じゃないから、幾ら喚きたててもメディアは取り合ってくれないだろうし、その反面刑事って立場から、真面目に聞いてくれる人間もいるだろうしね。」

「———全く、人の迷惑顧みない身勝手 なんだから！」

「副長官が本当に秘密にしたいのは、他にあると思うわよ・・・。」

「———というと？」

「ほら！ へりの中であなたが、日本政府が海兵隊たちを本国に送り届ける準備を始めたのかって聞いたら、副長官血相を変えて否定したじゃない！」

「そうそう、交渉相手はペンタゴンで決定権は合衆国大統領だって・・・息巻いてました。」

「私ね、今度のことは全てペンタゴンの指示だと思うの。在日米軍も日本政府もその茶番劇に付き合いさせられている・・・。」

「———どういう事ですか？」

「岩国の米軍基地に全く動きがないじゃないの！ 配下の兵隊たちが反乱を起こして、外国の住宅地や港湾施設を占拠してるのよ、不慮の事案だったら大挙して制圧に出動してくるはずでしょ！」

「それもそうですが・・・。」

「目的は、海上自衛隊呉基地を長期にわたって米軍の管理下に置くことじゃないかと思う・・・。」

「———というと？」

「確か、在日米軍の基地で、自由に使用できる港湾施設が近くにないのは、青森の三沢基地と岩国基地だけでしょ、ペンタゴンはアメリカ本土の火山被災者の一部を避難入植させるつもりで、呉基地周辺を占拠したんじゃないかと思う・・・。」

「———そ、それ大変じゃないですか！ 日本政府は認めたんですか！ 呉の日本人、追い出されちゃうんですか！」

「そりゃ、大変だけど国際的な緊急避難って意味じゃ、政府も認めない訳じゃないと思うの。」

「———アメリカの避難民が何万人も押しかけて、呉はアメリカになっちゃうんですか！」

「それはないわ・・・アメリカの避難民もそんなに長く日本に住めないと思う。」

“どうして？” と聞き返そうとしたその瞬間だった、二人のスマホが同時に鳴動し始めた。―― 緊急地震速報 だ！

「―― 笑ちゃん、車を路肩に寄せて！」

ヘッドライトに照らされた国道の路面がゆったりとうねり始めた。眼下の暗い海面がユラユラ光を放って揺れている。はるか後方の島々の陰から激しい稲光が全空に広がる。何かが引き千切られる乾いた音が重なり、国道の上の暗い山がゆっくりと滑り落ち始めた。直後に激しい突き上げが車を襲い、二人はシートに激しく叩きつけられる。薄れる意識の中で笑子に向かって “日本も火山国だからね！” と大声で叫んだ気がした。

―― 終わり ――

以上、全てフィクションであり、実在する個人、団体等との一切の関係はありません。悪しからず、ご了承ください。尚、添付しました画像は “PhotoAC “ より転載させていただきました。

あめりかの身勝手

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
